

Rolf Hochhuth:

Der Stellvertreter

森川 俊夫

ナチズムと、それがヨーロッパにのこした傷あととは、ドイツ人、とりわけドイツ知識人にとっては、何らかの形で対決し、克服しなければならぬ問題であるが、ひとびとが、大戦の興奮と憎悪から、まがりなりにも解放され、戦争とは直接かかわりのなかった世代が育ってきた今日、彼らのうちによりやく、当時の事態を冷静に検討しようとする姿勢が生じてきた。たとえば、戦中派ともいべきマックス・フリッシュのドラマ「アンドラ」、あるいはここで取りあげる、一九三一年生まれのクルト・ホーフートの「代理者」もこの姿勢の産物であって、ふたりの作家はともに、ナチズムとその罪業の断罪者としての不毛な役割とは無縁なのである。ナチズムが野蛮、残虐性、非人間性を養分とし、怯懦を土壌として育ったものと考えられる以上、すべてのひとびとは、おのれのうちなるナチズムを認識し、克服しなければならぬ、これが、このふたりの作家の言おうとしているところであるらしい。この観点からすれば、ナチズムの問題は、たんにドイツ人の問題であるばかりでなく、人間の問題、われわれ自身の問題に化するのである。

たしかにこれまでの、たとえばユダヤ人虐殺問題などに対するわれわれの考え方には偏向があったと言えよう。いたずらに犠牲者の膨大な数を挙げ、下手人たちの非人道性に憤激するばかりでは、決して犠牲者たちの回向にならないのみならず、かえって、その天文学的数字とおなじ距離を、われわれと下手人

とのあいだに見ようとする危険すらあるのである。「アウシュヴィツのような収容所の運営にあたっていたのは精神異常者や色情狂などであった、と考えて胸をなでおろすことは残念ながらできない。正常な人間がここで『仕事』にあたっていたのである」言いかえれば、犠牲者の数は、下手人の非人間性の度合を示す尺度ではありえないのであって、人間の感覚は、最初の経験でいかにはげしく揺り動かされようとも、おなじ刺激が重ねられてゆくうちには反応を示さなくなることもありうる、というごく日常的なわれわれの体験が、ここでも立証されているのである。

さらにまた、「アウシュヴィツ? わたしは全然知らなかった、わたしにはユダヤ人虐殺の責任はない」というドイツ人の返答に、われわれは、それが事実であっても、しらしきをおぼえ、法的責任の次元をこえて、人間としての責任というものが存在することを改めて想起させられたものであった。この点を衝いたのが、一九六一年に初演されたドイツ系スイス人フリッシュの「アンドラ」である。舞台は、ユダヤ人迫害を旗印とする黒の国に脅やかされている、白の国アンドラであり、主人公は、生粋のアンドラ人でありながら、ユダヤ人と見做され、自分でもそう思い込んでいる青年であって、この青年が同胞に迫害される悲劇的な運命が描かれる。そして登場人物がひとり幕間ごとに現われて、事件を回想しながら、その事件における自身の無実を主張するのであるが、このような白の国アンドラの住民と、黒の国（この国の人間は全く舞台には現われない）との関係は、まがうかたなく、ドイツ人とナチ指導者の関係である。ところでフリッシュが、このドラマはナチズムのユダヤ人政策を想定したものでない、とことわっているのは、ドイツ人の問題として限定的に把握されないで、人間の問題として扱えられることに積極的な意義を認

めているからであろう。たしかに、ユダヤ人に対するキリスト教国民の伝統的な憎悪が、ナチのユダヤ人政策に迎合して燃えさかった事實は、ドイツ国内のみならず、ナチに制圧された諸国においても見られたのである。

ホーホフートのドラマは、おそらくこのような考え方を基礎に、本来悪に対立する原理であり、また、その組織体であるカトリック教会の首長、キリストの「代理者」としての教皇が、ナチによるユダヤ人虐殺にいかなる態度をとったか、あるいは、断乎たる態度に出れば、ナチ指導者としてはそのおそれるべき作業計画を中止したと思われるときに、教皇は逡巡し、結局ユダヤ人を見殺しにしてしまったのではないか、といった問題を追求している。この重大な告発に対し、カトリック教会の側から数多くの反論がおこなわれるのは当然であるが、しかし、その多くはドラマ自体のもつ説得力に抵抗するだけの論拠を欠いている。「親独的」であった教皇ピウス十二世に対しこのような挙に出るのは忘恩であるとか、ユダヤ人虐殺の責任をカトリック教会に帰し、教皇に帰するのは責任転嫁もはなはだしいといった各方面からの批評は、それ自体考察の対象として興味深いものではあるが、議論としてはまったくナンセンスである。

プロテスタント側では、たとえばマルチン・ニーメラー博士はホーホフートに、その作品の意義を高く評価する私信を寄せているのに対し、告白教会の長老であるオットー・ディペリウス監督は「ベルリン日曜新聞」に否定的な記事を寄せている。すなわち、動乱の時代にあって三億の信者に宗教的な責任をもつ教皇の任務がいかに重いものであるか、それは余人にはうかがい知れないのであって、しかも、全体主義国家における圧迫というものについて、何の経験もない若い作家が、そういう地位にある教皇を批判するのは軽率で

ある、というのである。これは、芸術作品に対する批評とは異った発想の発言であるが、この作品をめぐるほとんどすべての批評は、まず、教皇批判の可否、妥当性に論点を集中させるためか、非・芸術批評的性格をまねかれないのである。ともあれ、ディペリウス監督は、ナチ支配下のドイツにおける告白教会の活動に触れ、一切を失わないためには、ある程度の譲歩が必要であったと述べ、ピウス十二世のナチに対する態度と、告白教会のそれとの共通性を、したがって教皇の行動の必然性を容認しているが、ここでわれわれは、ドラマそのものの内容を見ることにしよう。

舞台は一九四二年八月のベルリン・ローマ教皇庁大使館にはじまり、一九四三年十一月アウシュヴィツ強制収容所でおわるが、その間に、教皇ピウス十二世の登場する、サン・ピエトロ教皇宮殿の場を頂点として、多くの場面が配される。物語は、敬虔で活動的な、告白教会に所属するプロテスタントで、ナチズムに対する抵抗をもっとも効果的に遂行するための手段として、親衛隊に潜入したクルト・ゲルシュタインと、教皇の法律顧問を父とし、イエズス会神父であるリカルド・フォン・タナ伯爵とが、教皇を動かして、ヒトラーとの政教協定の破棄を決意せしめようとする努力を描いて、教皇との会見の場に至るが、期待を裏切られ、一切の努力が水泡に帰したと悟ったリカルドが、教皇に「かわって」、キリストの「代理者」の責務を果たしてその栄光を守らんがため、ユダヤ人と同行してアウシュヴィツに赴き、そこでユダヤ人と運命をともにするいきさつが、最後に語られる。

クルト・ゲルシュタインは、ホーホフートがこの作品を計画し、資料を集めているさいに、いわば「発見」した実在の人物であって、親衛隊に所属していたにもかかわらず、その志向が逆のところにあることを、前記のニー

メラー、ディペリウスをはじめとして、多くのひとびとが証言しているし、バリのユダヤ人記録蒐集センターは、ゲルシュタインを「神なき者のむれのなかの正義のひと」と呼んでいると言われる。東欧出張旅行で各地の殺人工場を目撃し、しかもその「能率」をたかめるために青酸化合物調達の命令を受けたゲルシュタインが、できるかぎり命令の遂行を怠る一方、所属教会関係者や第三国外交官に情報を伝え、ベルリンの教皇大使館を訪れた、という、各種の証言や資料によって確認されている事実は、舞台においても語られ描かれている。その後、一九四五年五月はじめ、南独ロットヴァイルでアメリカ軍に捕えられ、アメリカ軍をはじめ、ゲルシュタインを釈放すると同時に、予想される復讐の手から保護しようとしたが、何らかの理由からフランス軍に引き渡したという。以来ゲルシュタインの消息は不明となり、ニュルンベルクの国際軍事法廷がゲルシュタインの証人としての価値に気づいて調査したところ、フランス側は、一九四五年七月二十五日バリ、シュルシュ＝ミディ刑務所で死亡と伝えただけで、死因その他は明らかにされなかった。

これに対して、リカルド・フォンタナのモデルはベルリン司教座聖堂参事会会長ベルンハルト・リヒテンベルクである。リヒテンベルクは公開の席上でユダヤ人のために祈ったために投獄され、東欧においてユダヤ人と運命をともにしたいと願い出て許されたが、この行動に対し教皇がいかなる評価をくだすかについて、深い関心を寄せていたという。刑事たちはこの高位聖職者の願いを一応きき入れたものの、しかし東欧のゲットーに送ることをためらって、ミュンヘン近郊のダッハウに移すことにしたが、リヒテンベルクはその移送途中で死亡した。したがってリカルド・フォンタナはこの聖職者の伝記的再現ではなく、共通するところは、ユダヤ人のためにみ

ずからも犠牲となろうとする、行為とその目標である。

リカルド・フォンタナの行動がこのようにユダヤ人の現世における救済を狙いとしながら、同時に神とその教会の栄光に汚点を残すまいとする宗教的情熱に貫かれていたのに対し、伝記作者によって「神の密偵」と呼ばれているゲルシュタインは、もっぱら当時の政治情勢の計算を基礎として計画を立て、行動したのであって、たとえその計画がいかに無謀に見えようとも、現実の把握について深い自信をもっていたのである。ゲルシュタインは、教皇が政教協定の破棄をもって迫れば、ヒトラーといえどもかならず譲歩してユダヤ人虐殺を中止するに違いないと確信しているが、その根拠には、ナチ指導者が不利な戦局を前にしてカトリック教会の動向に神経過敏になっている事実、そして司教クラスのプロテストに対してすら、ナチが譲歩を示した事実などがあげられている。当時東部戦線では、スターリングラードの攻略に失敗し、イタリア南部サレルノには連合軍に上陸されて劣勢を否定しがたかったドイツ軍としては、国内人口のほぼ半数を占めるカトリック教徒を敵にまわすことは決定的な打撃を意味していたのである。したがってミュンスターの司教ガーレン伯爵が、説教壇において公然とナチによる精神薄弱者に対する安楽死を弾劾したとき、彼らは司教に一指も加えることができず、安楽死計画を撤回しなければならなかったし、ユダヤ人虐殺計画に関しても、たとえばスロヴァキアでは当地駐在の教皇大使の努力によってユダヤ人のアウシュヴィツ輸送計画が中止されたという。要するに、教会の抵抗が強かったところでは、ナチは教会の刺戟を抑えたのである。したがって実在のゲルシュタインは、ドラマのゲルシュタインとおなじく、個々の聖職者の抵抗を教会全体の抵抗にたかめるためには、教皇に実状を伝え、教皇に政

教協定の破棄を決意してもらおうと、とりあえずベルリンの教皇庁大使館を訪れるのであるが、ここでは冷くあしらわれる。ベルリンの教皇大使にとって、したがってヴァティカン当局にとって、ゲルシュタインのもたらしした情報はすでに処理済みであり、外交官としての教皇大使には、ヴァティカンからの訓令がない以上、公的にプロテストする資格がないというのである。

ヴァティカンが、したがって教皇ピウス十二世が、ナチのユダヤ人政策にどのような反応を示したかが、ここで問題になるわけだが、ドラマにおいてはその立場がふたつの動機からなることが説明される。すなわち、ドイツの戦力がいかに低下したとはいえ、もし教皇が公然とヒトラーを弾劾すれば、ドイツ国内のカトリック教徒がユダヤ人とおなじ運命に見舞われるであろう、教皇としては信徒たちに殉教を強いることができない。さらに、ヨーロッパはコミニズムの脅威にさらされている、もしドイツという緩衝地帯が失われてヨーロッパがソヴィエトと境を接することになれば、ヨーロッパの文明の明日は覚束ない。したがってヒトラーに対しては、ヨーロッパの防衛者としての使命を意識させることこそ時代の要請であって、連合国側がカサブランカ会談において、ドイツの無条件降伏を要求した以上、ドイツと世界とをつなぐ有効なルートは政教協定を措いてない。したがって政教協定の破棄は論外である。教皇のこの見解は、ローマのユダヤ人がドイツ親衛隊とイタリア民兵の手で逮捕されアウシュヴィッツへ移送されたときにも変らない。

教皇とゲルシュタイン（すなわちホーホフト）の情勢判断のいずれが正しいか、これは議論の大きくわかれるところである。しかし教皇のナチに対する態度が、その当否は別としてきわめて政治的な判断にもとづいていたことは、歴史的にも明らかである。ここに

宗教的バトスによって行動するリカルドの人間と巨大な組織の責任者としての教皇の相違があるのだが、ホーホフトは、組織が組織であることによって生ずる責任があり、これを回避することは大きな罪である、と考えていると言えよう。この罪はこの場合、ナチのユダヤ人政策を契機として生じたものではあるが、言うまでもなく、法的に追求される罪とは異った次元にある。したがって、このドラマにおいては、残虐行為を命令し実行した組織とその成員の罪は教皇の責任とは別個に追求されている。そしてホーホフトは、当時官憲の追求を逃れた関係者の多くが、今日正常な市民生活を送っている事実をふまえて、彼らの罪を個別的にではなく、すべての人間に可能なものとしてとらえようとする。そのため親衛隊関係の登場人物については、そのモデルになった人物の現在の職業、生活がト書きに併記され、全体主義体制下における、また現代社会における没個性を象徴するために、ひとりの俳優がいくつかの特定の役割を演じるように、とくに指定されるのである。

ここでは、このドラマの提起する問題の二三を取りあげたにすぎないが、ちなみに、この作品は一九六三年二月二十日ベルリンにおいて初演され、テキストは、出版直前に刊行を断念した出版社から、ローヴォールト社が版權を譲り受け、おなじく一九六三年二月に発刊した。

Rolf Hochhuth: Der Stellvertreter.

Rowohlt-Verlag, Reinbek bei Hamburg
1963.